

GR
白雲郷

とりお



22

昭和47年4月1日

表紙画 阿弥陀三尊の説明

中央 阿弥陀如来（総高3.27 m）御脇立 観音、勢至
の両菩薩（総高2.36 m） 檜材 平沼桐江作 彩色 平沼 浄

阿弥陀如来の御利益

人間が死にのぞんで「南無阿弥陀仏」と、となえると阿弥陀如来は直ちに、二十五菩薩をしたがえて、お迎えに来られます。そして観世音菩薩の持つておられる蓮の花のうてなに、その人をのせて、極楽浄土にご案内して下さるのです。

これで、人間死後に於ける幸福と云う最も重大な希望が達せられるのは有難いことです。

皆様の奉安なされた、一万体観音即ち御先祖様も必ずこの幸福をうけておられることと存じます。

しゅみ段

黒大理石で獅子が花にたわむれるレリーフがとり入れてあります。



上部欄間の上のレリーフ

お釈迦様の誕生。成道、ねはんの三行事を表象。
向って右は釈尊がルンビニーで誕生なされた時咲いていた無優華の花。



中央は、ブタガヤで成道を達せられた時の菩提樹。

その左は、クシナガラでねはんに入られた時のサラソージュ。

このレリーフは、壁面の一万体観音が見えるようにすかしぼりにしてあります。

昭和四十七年四月一日発行 22号 とりあ

表紙 阿弥陀如来(写真カラー)

裏 阿弥陀如来の説明

目次

印度附近の旅路……………(其十二)……………桐江……………(2)

可睡育の御授戒の思い出……………(7)

道光禪師(故高階瓏仙猊下)の御法話瓏仙いかだ集より……………(其五)……………(11)

西遊記……………(其十七)……………岡部千三……………(15)

田舎医者……………(其二)……………見川鯛山……………(20)

老万休奉安者芳名……………(23)

老万休観音御奉安の勸進……………(25)

納経塔の建立に就て……………(26)

終了した行事と救世大観音……………(27)

裏表紙 鳥居観音地図……………(27)

春の行事と花のお知らせ



印度附近の旅路

其の十二
桐江

デカン高原に集中する岩窟院

印度の中央にある、デカン高原の岩塊は、彫刻に適するので、石窟の寺院は、此の高原に数百ヶ所を数えるに及んでいるそうです。

その中でも前号に記しました、「アジャンタ」の二十ヶ所に及ぶ仏教窟院は、七、八百年と云う長い間に次ぎ、次ぎと掘られたもので、それらの窟院には、一万を越える修業僧がおったとのことですから、当時の仏教最盛期の模様が十分伺い得ます。

仏舍利塔と如来像の推移

この「アジャンタ」の石窟院で感じたのは、仏舍利塔の変遷です。

釈迦如来の入滅後、数百年は、信仰尊嚴の上から、釈迦如来を人間の姿とすることは許されませんでした。

たとえば、ボダイ樹を、如来の姿と見て、これに「レイ」を捧げて、礼拝している彫刻を、所々に見る

ことが出来ます。

アジャンタの窟院でも、始め造られた窟院の礼拝殿の正面には、大きな仏舍利塔が安置してありまして、如来像は、全くありません。

処が新しく掘られた、窟院には仏舍利塔の正面に、如来像が小さく彫られて居り、その如来像は次第に、

大きくな

り、最後

に、仏舎

利塔は、

如来の光

脊の様に

なって、

七、八百

年もの間

に於て、

信仰の考

え方が変



ボダイ樹にレイを捧げて礼拝している彫刻

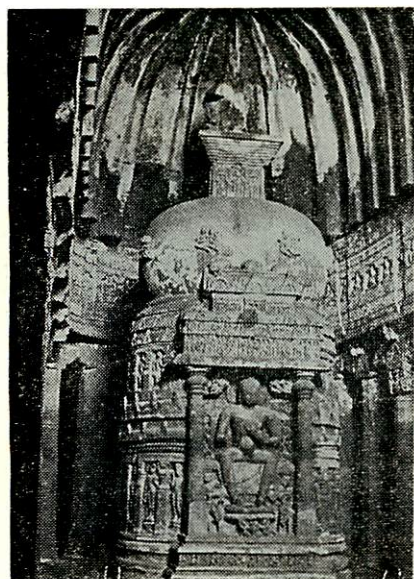
遷したことを、二十三の窟院で十分知ることが出来ま
して、誠に興味のある問題です。

如来像のない時

代の仏舍利塔



仏舍利塔の正面
に如来像が彫刻
されている



オーランガバッドの見物

夕方アジャインタと別れて帰路につき、昨夜泊った、
オーランカバットのホテルにもどり、翌十九日に飛行
機が遅れたので、此の附近を見物する事としました。

世界七大建築の一つと云われる、タジマハールと同
形の小タジマハールを見物しました。シャーシヤハン
王の息子が十年かかって、亡き母のために造ったもの
で、貝殻を砕いてシッキイで塗り上げ下方は総大理石
で造られている見事な設計です。

此の小タジマハールのベランダから眺めると周囲の
山脈には遠く又は近くに岩窟寺院が沢山見えて宗教の
盛んな往時が忍ばれます。

此処にはインドで珍らしい古代の水道や水揚げ水車
が残っています、其の附近には無数の根が枝からぶ
らさがっているバーニヤツリーの大木が多く熱帯的
気分を十分味えて画の様な美しさに心打たれました。

エレファンタ島の見物

ボンベイ市の海岸から六哩程の処にエレファンタ島
と云う島があります。象の彫刻が昔あったので、象の
島と呼ばれています。大都市の海岸だけあって、泥海

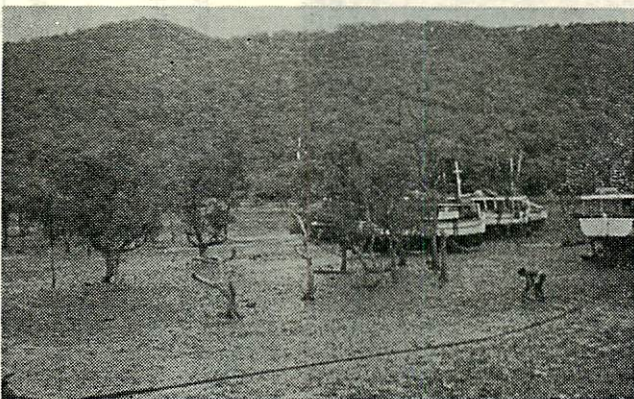
で、風景を味うと云う風情はありません。

只珍らしいのは、此の島の海岸に海水中で育つ大きな木が沢山あります。

丁度引潮時で、根元迄見えましたが、満潮の時は海面に美しい林相を浮べることと想像しました。

此の海は七・八米も海水の干満がありますので、島に上陸するの

には三度も大、中、小と舟をのりかえるので時間がかかりますが、海上での冷風の御蔭で久方ぶりに炎暑を忘れしました。



干潮時の海中の樹林

右側に島があると思つてよくよく見た処、それは転覆している大きな汽船で水平線にその腹を横たえてい



四人がかりでかつぐ輿で200段昇る

るのでした。鉄鉱石の輸出国だけあつて、スクラップする程の価値がないとの事です。

島の岩窟寺に登るには、二百余の高い石段が、目の前に突つ立つていて、その下には、名物の四人でかつぐ輿人足が、客を呼んでいるので、是に乗るのも話の種になると思ひまして一同のすることにしました。

婦人がのると、輿の雲助は、大喜びで妙な声で歌を歌い、踊りながら登るかっこうも、一興でした。

此の島は古い歴史がありまして、色々の珍らしい建

物や、碑が老樹の間に点々と、見えかくれして居り、林内には尾長猿が身も軽く枝から枝へ飛び渡って居るのも一興でした。

頂上にあるヒンズー教の、石窟寺院には拜殿の正面に、六米もある、三面の神像やシバの神、其他沢山の彫刻がありました。石窟はもう見飽きましたのと、時間がないために、急ぎ足でざっと見て下りました。エレファンタ島に別れて、ハシケに幾度ものりかえ



六米もある三面のヒンズー教の見事な神像

て、本船にのり込みました。

ボンベイ市の港に上陸すると、英国が印度人を威圧するために作ったと思われる「印度の門」と云う、馬鹿でかい石門が、孤独なように、哀れな姿が、夕日に透らされているのを見ると、印度と英国の因果の歴史を物語っている様に、哀れに見えました。

早速、病院に、鞭打ちで、首にギブスをはめて、入院なさっている、吉崎さんを見舞いましたところ、明日帰国を許されたとのことで、ほっといたしました。

ボンベイの市内見物

ボンベイは印度の門と云われ、英国が最も力を入れた英国風の大建築が軒を並べております。

バック湾は、馬蹄形の海岸が名所ですが、ビル建物が囲まれているので、夜景は「ダイヤモンドのネットワークスをつけた女王」と云われる如く、美しい海岸になるそうです。

イラン国は拜火教の本山ですが、回教に迫害されて、其の一部がボンベイに住みついたのです。

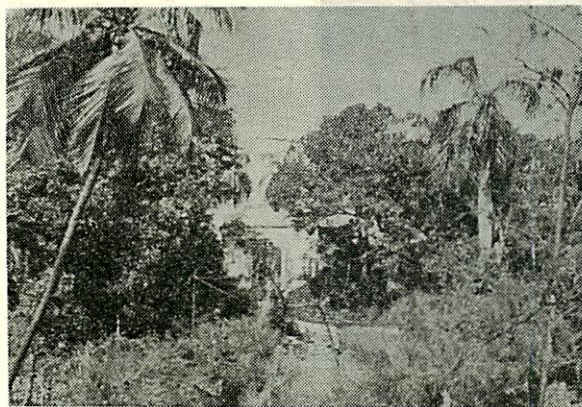
拜火教では、人間の死体をあらたかな神火で焼く事は恐れおおいとして、火葬を禁じているので、死体は、はげたかに食わせると云う珍らしい鳥葬が行なわれて

います。

海岸の丘に、「沈黙の塔」と云う円形のお寺が樹木の間から見え、その上を沢山のはげたかが、無気味に舞っておりませんが、寺内には僧と、オンボー（番人）以外は縁者も入る事が出来ないと云うことです。

はげたかは死人の目が好物と見えて、先ず目をつつきますが。

右の目だと
霊は、故国
のイランへ
帰れると云
う迷信から
遺族達はそ
の様子を番
人から聞いて、
葬場を
はなれると
云うことで
す。又印度
でなくては
見られない
珍らしい公



拝火教の鳥葬寺院 木の間に一部見える

設洗濯場や、花の公園、博物館等が印象深く心に残っています。

その日の午後二時印度にお別れして、飛行機でセイロン島に飛び立ちました。

私は印度には三回参りましたが、見る処が多くて、

東南印

度の宗

教遺跡

は見て

おりま

せん。

さすが

印度は

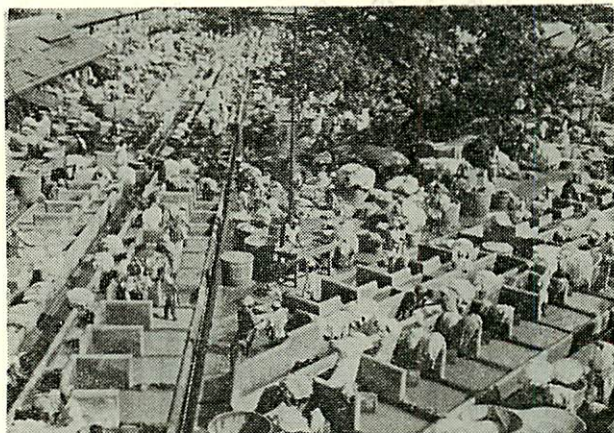
広うご

ざいま

す。

(以下

次号)



珍らしい市営の屋外公設洗濯場



可睡斎の御授戒の思い出

桐江

私夫妻は、昨秋、袋井の名刹、可睡斎に故高階瑞仙猊下のお墓まいりをいたしました。今から丁度十一年前の昭和三十五年にこの可睡斎で、御授戒を受けて高階猊下に親しくご教導頂きました。なつかしい事を思い出しましたので、其時受けた五日間の御授戒の模様をうろおぼえ乍ら書いてみたいと思います。

これには玄奘三蔵法師の靈骨を鳥居観音に分骨された恩人、水野梅曉先生の遺品の中に三四回も御授戒をお受けになった御血脈がありました。又前年秋には長男邦彦を失った淋しさもありました。高階禪師様にすすめられて、いつか一度は仏徒として御授戒を受け度いと云う熱意から、多忙な銀行業務の中をさしくりこの戒会に参加させて頂いたのであります。

可睡斎と云う寺号となつた由来

静岡県袋井に、高階猊下がご齋主としておられた可睡斎は六百年の古い名刹であります。十一代目の住職等膳和尚は、家康の父及び家康の幼名（竹千代丸）を

戦乱の巷から救い出した事がありました。

其の後、浜松城主になった家康公は親しく和尚を招いて旧恩を謝したのですが、その歓待の席上で和尚は無心にいねむりをしましたので、居並ぶ家臣が心配していたところ、家康は、にっこり笑って「和尚我れを見ること愛児の如し、故に安心して睡る。われその親密の情を喜ぶ、和尚睡るべし」と言つて、それ以来「可睡和尚と愛称せられ寺号も可睡斎と改められて十方石の待遇を受けられました。三千人も宿泊される大道場となり、四代相次いで大本山永平寺又は総持寺に昇住なされた名僧が出ておられ、現在は、原田亮裕老師が齋主となつておられます。

御授戒とは

仏教の戒法は二百戒、五百戒と沢山あります。東南アジアの小乗仏教では百六十戒を嚴重に守つておりまして、結婚前には必ず一年間僧院にはいつて仏教の修業をしております。ところが禅宗の戒法は三帰戒と、

三聚淨戒と、十重禁戒の十六戒だけですがこの中に一切の戒法の精神がおさまっております。人間の生身は、このように沢山の戒を受けねばならぬような罪を犯し易い生身を持っておりますので、人間が少しでも悪を離れて、良い事をするように導くと云う有難い行事が、この御授戒であります。そして仏様と親子の因縁を結び仏様と全く同体の資格を、この身この心に授かるとうゆ最高の資格がこの身にそなわれますから八百万やおもろの神様が常にその人を守護して下されて色々の天祐神助があるとの事です。

仏教が我が日本に伝来してからご皇室の尊信が殊に篤くあらせられ、歴代の天皇の中には、御授戒遊ばされて入道の御身となられて、法皇と申上げるお方が沢山ありました。

殊に聖武天皇、孝謙天皇は奈良、東大寺に於て、鑑真和尚より文武百官四百余名と共に授戒遊ばされたと申します。

また栃木県の薬師寺と福岡県の観世音寺とに戒壇を設けさせられて一般人にも授戒を受けさせられました。がこれを日本最初の三戒壇と申して今日尚を、その跡が残っておるとの事です。

御授戒の思い出

私等が袋井駅に下車しますと迎えの自動車で可睡齋に案内され、特別の室を与えて頂きました。

今回の御授戒に参加した善男善女は約千人近くで実に盛会でした。

寝ぼすけの私は朝四時に起きるのがにがてでした。鐘の音に導かれて、全員本堂に集合しまして何十名かの僧侶の読経に始まり、毎日戒法の道理や仏教の法話があります。そして其間、希望者の先祖の法要等が数回行なわれます。善男善女全員参列のもとに供養されるのですから中々盛大で有難い事と思えました。

一食を布施する檀那

一般の授戒者は五日間で一人千円と米三升納めればよいので之ではお寺は赤字となります。ところが毎夕食には三四名の檀那が夕食を布施します。

広い部屋に数百のお膳の前に信者が正座しております。が其の夕食と云うのは一汁一菜の簡単なものです。

私夫妻も一度この檀那になってみました。が、僧に導かれて居並ぶ信者の間を歩いて行きますと一同は私等に丁寧合掌礼拝されながら正面の仏前で礼拝して焼

香するのです。俗世間の会食ですと、こんな粗末なものと言われるようなものですが一同は一飯の布施を心から有難く受けている真実な態度に涙が出るような又くすぐったいような氣もしまして、わづかな布施でも仏教では有難い事だ、よい事だと言うことを、つくづくと感じました。これも御授戒中に受けた私の最も強い印象でした。

懺悔の式

授戒会は五日間毎日お説教師より戒法の道理やら、仏法の道理など数回聴聞し又三世諸仏（過去、現在、未来）に礼拝します。二日目には僧に導かれて、長い廊下を全員でぐるぐるお経をとえながら歩いて各所の諸仏に礼拝し、三日目の夜に懺悔の式がおごそかに行われます。懺悔の功德は、お経に曰く、自ら罪ありと知らばまさに懺悔すべし。懺悔すれば即ち安楽なり、懺悔せざれば罪益々深し。又曰く懺悔は能く煩惱の焰をやき天路に往生し三界の地獄を出て菩提の華を開き金剛寿をのぼすと言うような仏教の根本理念と云うべきものでして四日目の夜の儀式で立派に戒法を受けて仏様と親子の縁を結ばして頂き心もすがすがしくなります。

登壇と血脈

このように毎日四時には起床、お経の声の中に寝起きし禅堂の作法によって食事を行い懺悔の式が終りますと最後の日にいよいよ登壇と云う尊い儀式が挙行されます。

御本尊前の高い壇の上に信者が二十人位づつ登って正座しますと、其の周囲を、高階下其他十余名の高僧が、お経を高らかに唱えつつぐるぐる廻り正面に来られると吾々に礼拝されます。そのお経の一節は修正義の第三章にある「衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る位大覚に同うし已る、真に是れ諸仏の子なり」と

乃ちお前等がこの御授戒を受けると仏様の位にはいる事が出来るのだ。其の位は大きな覺りを開かれた。釈迦如来と同じだ。之でお釈迦様と同じ血のつながりが出来て、み仏の子となったのだ、と云う実に有難いお示しです。之を授戒入位と云うて仏様の籍に入り菩薩の位になったと宣言された訳です。

この壇上でこの儀式を受けると、生き乍らお葬式を受けた心地がして心もかるやかに、そして解脱した心地になり、いつ死んでもよいと云うような安心感を強

く受けます。そしてお血脉と死んだ時用ゆる経帷子かたびろを頂きました。私共夫妻は、高階猥下より立派な戒名をつけて頂き、その戒名を書いたお袈婆を頂戴致しました。今でも鳥居観音に参拝の折は必ずこのお袈婆をかきさせて頂いております。

御授戒を受けても、人間の持つ諸悪をなおす為めの十六戒は中々実行出来ませんが、生き乍らお葬式を受けたと云う事から諸欲を離れて清らかな心になり、沢山の諸仏に守られて安らかな日を送り得るようになった事と有難く思っております。

現在、総持寺其他の寺院でもこの行事は挙行されるそうですから、皆様には心の安らぎをお受けになる為めにも一度この御授戒をお受けなされては如何ですか。

血脉とはお釈迦様より印度、支那、日本と戒法をご相続になりました代々の系図書とでも申すようなもので、それを頂きますと丁度世間で養子に行った人が慥かに入籍済みの戸籍謄本を手に入れたようなもので、仏様の系図の中に這入た証拠がお血脉であります。高階瓏仙猥下にはお釈迦様から九十三代目であります。



高階猥下より得度を受けた時の記念写真 中央高階猥下右筆者、左原田現齊主、別所老師



道光禪師（故高階瓏仙猊下）

御法話

（瓏仙いかた集より）

（其五）

（十四） 禪の宗意から仏教を話す（つづき）

前号で、仏や神の前にぬかづく時、誰も清い心になるとお話ししましたが、人は自分の心に、神にも仏にもなり得る本質を持っていますので、神仏を拜むのは、自分の心にある神仏を引出すための、一種の手段であります。ちょうどご婦人が、鏡に向ってお化粧すると同様に、自分の心の姿を、向うの神仏に写して、心の化粧をしますので、神仏を拜むのは、自己を尊重することになります。

ところが、時にはまちがった拜みかたをする人があります。即ち仏様や神様にたのんでおいたから、これでいいのだというように、責任を神仏に持たせたり、『病気を治して下さい』とか『宝くじをあてて下さい』などと、利己主義的な信心は、真の信仰ではありません。まるで神仏を我慾の媒介者のように思う甚だ低級な信心です。真の信仰は、もう一步進んだとこ

ろにいつて欲しいのであります。

人はそれぞれの職にあり乍ら、信心を忘れず、目の事にとらわれず、心に広い世界、大きい明るい世界を、ひらいて行かねばなりません。

ばい菌は怖いものですが、ばい菌に感染しないように、自分を健康体にする外ないと同様に、自分の内面即ち心中に、強く明るい天地をひらいて、自己の真価を向上させるべきであります。

二宮尊徳翁は、十幾歳の時、観音の辻堂で、旅僧が誦んだ観音経を聞いて、観音の精神を汲みとり、報徳の信仰を身につけられたのでありまして、こういう人が地方地方に一人でもできたらば、その人格の光明が社会を浄化し、偉大な救済ができるのであります。

(六)

或る信仰家がかかれた『仏教世間篇』に、実社会上に仏教の信仰を生かしていく、即ち、仏教の眞生命を示してあります。かんたんなものですから、言葉を添えてお話ししましょう。

仏教と世間とは、はなればなれのものでなく、その原理は『空』であって、仏教の一切法にいう『空』と同じです。但し其『空』は、世間でいう一方に物があって、一方に何も無い『空』とは意味がちがいます。

それは形のある現象界が、皆仮りのものであって、水の本性は鏡のようなものですが、風が吹くと、波の姿が現れるように、すべて物質界は『空』という真理の動いた現象であります。本体の時の水は波の姿が見えない、従って真理も本体の時は、姿が見えないから、『空』又は真空という言葉で現わします。

しかし真理はいつも動いて、万有界の現象を見せていますから、人の姿も何も彼も、本来『空』であると示されています。

さて、人は自己を中心として、小さな範囲にしばらくして苦しんでいるのが普通ですが、一旦真理の境地に達すれば、真空で清浄な心、即ち自我をはなれて、仏心の境地に生きられます。

複雑な世間も、仏法と世法とを融和する方法を以てすれば真理を理解出来るのであります。そこで『空』を、今一度わかり易く御話しましょう。

『空』は万物の本源にて、常に動いて事物を現わします。万物は空より生じ、空に帰します、譬えば、天にあれば雲、降り来れば雨や雪などといい、地上では水と呼ぶも、本性は一つです。天地、星辰、風雨、山川草木、人畜みな本源は同一です。同じ練土から、人形、動物、尊い仏像が作れるのも同一真理です。

般若心経では『空』を『色』（形あるもの）といい万有の姿の見えることを指します。一切の物は、空から生じ、空にかえるという仏教の平等観であります。

(4)

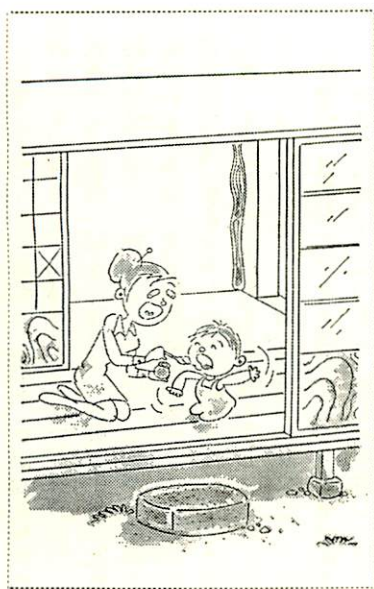
次に『自己』も亦『空』の現われであって、本来生死なきものです。眼、耳、鼻、舌、耳、意は、人に主観のはたらきをさせる機関であります。従って、外界に接触する機関として、大切なものですが、これにとられるようになると、自我の利害の渦にまきこまれて、本性を見失ない、無明の心になります。そして、色、声、香、味、触にとどまって、それ等のために、本性を蔽われて、凡夫生活に苦しむことになり、全く自分と物だけが存在するかのような見解におちいる結果、貪瞋痴の三毒と、財色食名睡の五慾に執着し、天からさづかった尊い本性を失ってしまいます。

無明とは、種々の現象に眼がくらんで、広い世界を見失ない、迷いの闇をたどることです。故に一度仏心にかえれば、なごやかな人生となります。

親子はたとえ顔容がちがっても、心は一体ですが、他人となるとちがいます。それが、本性を見きわめて仏心がひらけますと、凡ての人に對して、親が子に對する如く、広い心の世界があらわれます。

ある人が『親の心』という題で、母親が赤児に、食物を食べさせている絵を描きました。尨が絵の中の母親が、口をむすんでいるのを見て、心ある人が、『赤児に口を開けさせて、何か食べさせる時は、知らず、知らずの間に、母親も口をあけているのが、真の姿です』と教えたということでした。

仏は一切衆生を平等に、わが子とごらんになっています。母親が口をあける無心の姿こそ、仏心の姿と言えましょう。吾々も自我にとらわれず、修養して、仏心に目をひらき、自他のへだてをなくして、広い平和な世界を実現するように、『心の世界』をひろくように努めましょう。



四

精神の修養に『安静』と『活動』と二方面があります。まづ『安静』からお話しましょう。

いろいろ方法がありますが、原理は一つで、精神の統一により、妄想動乱し易い散動の精神をしづめると、本心の光が出ます。仏法では般若の智慧と申します。水は動かねば、顔や姿はつきり写ると同じ理屈です。ところで安静の修養は次のようにします。

安静とは自己の本性をさとり、静かに心神を養うことにて、自己が本来空なるを悟り、色声香味触に迷うことなく、外界の誘惑を離れること。次に心を静め、気を落付、大祖道元禪師の坐禅儀にある、非思量——坐禅をして落付く心境——になって鼻息を静かに通ずるようになります。

これは誰しも、気を落付、呼吸をととのえることが大切で、一寸した事でも、口まであけて、ハッハッと息をするのは修養の足りない証拠であります。

この呼吸をととのえる坐禅の消息法を、一日十分間づつでも行なうことが、安静の第一歩であります。

偕て、次は、如何なる場合でも、氣息を乱さない修養が大切です。この世は複雑で、苦あり楽あり、生れる人あれば死ぬ人あり、心も喜怒哀愛憎の境地が往来し

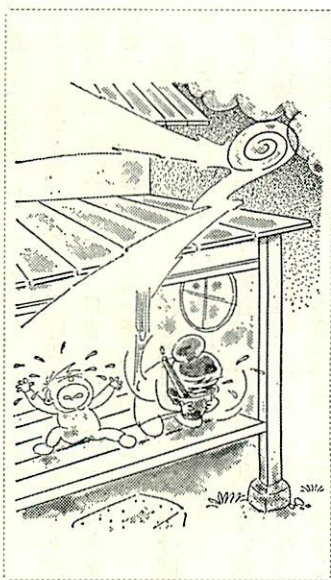
て、止まることはありません。併し、いかなる場面に
出会っても、絶対に、氣息を乱してはなりません。

武道でも、鍛練が足りなければ、呼吸や手足が乱れ
て勝負は負けます。達人ともなれば、平素から訓練が
出来ていますから、突差の防ぎが出来ます。商売でも
日常生活でも、どんな苦しい場面に遭遇するか知れま
せん故、平素の修練を怠らず、勉強しましょう。

それについて笑えない「笑い話」があります。

椽側で、母親が赤児をそばにおいて、味噌を摺っ
ていました。夕立が来て、近くに落雷した時、
親は子を忘れず、赤児を抱きすくめて、ふるえて
いましたが、そのうち夕立がしづまって、気がつ
いてみると、赤児は向うで泣いていて、自分は摺
鉢をすっかり抱へていた、といひます。亦、『火
事だっ』という隣家の人の叫びで、まづ御先祖を
とお位牌を手拭に包んで、知合いの家に預けた
処、あとでよく見たらお位牌ではなかった。とい
う話も事実あった事として伝わっています。

次に、氣息が一度乱れますと、自己本来『空』の本
性を失い、安静の悟りを無くします故、油断なく注意
することです。始めの内は固苦しく感じるが、慣れる
に従って、精神安静、氣力満ちて、体力も強健になり、



何物にも迷わされない修養が出来ます。

呼吸のやり方は、鼻からして、下腹まで取入れるの
です。下腹を氣海丹田といって、ここまで呼吸を通わ
せなければ駄目です。胸先だけでやると、少しの心配
事でもすぐ気がつまって、頭重く、食慾もなくなり、
病人みたいになります。白隠禪師の内観法とは、これ
の事で、熟達すると、足の踵から呼吸したと伝えられ
る人さえあります。無我の本性に徹した修養のいき方
に達した真の流動です。安静の底力をレールにたとえ
ますと、固定した動かないレールでなければ電車は走
れません。寝つきの悪い人も、この要領を覚えると、
寝床の中に仰臥して、足を延して、何回かやれば、き
つと熟睡出来ます。



西遊記

(其の十七)

岡 部 千 三

悟空のらんぼう

法師は尚ことばを次いで、するどく悟空達に云いきかせるのであった。

經文をとりに行く途中で、ぬすみなどはたらくように、この使いはとても、とてもつとまらないぞ、わろかったと思う者は正直に云いなさい。ゆるしてやろう。だが、どこまでもかくしだてをするものは、もうわたしの弟子ではない。直ぐさまどこへなりと、すぎなところへ行ってもらおう。」

法師の声はかなしそうであり、又おそろしいようにもひびく、そして目には涙が光っていた。

「お師しようさま、申しわけございません、ご心配をかけて、本当にわるうございました。」

悟空は、そのことばにうたれたのか、体をこわばらせて、うやうやしく手をついた。

「八戒が、たべたいと云うもので、三つとりました。一つずつ三人がたべましたが、なんとその味のうまさ、何ともせつめいできません。」

「それ、ぬすんだのではないか、まだうそをついている。二十六あったと云うのに、二十一残っていた、と云うことは五つぬすんだことだ。とそばから子供は勝ちほこつたようにつめよつた。

「いや、いや、三つだよ」

「三つじゃない、五つだ、たしかに五つだ」

「三つだと云うのに、このおれをわる者にしたいのかとうとう悟空、おこつてしまった。そしていきなり飛び出して、にんじん果の木へ走り上って、力一杯木をゆすぶり、棒でたたき、とうとうめりめりという音と共に、たおしてしまった。

「こんな木がなんだ、何が大切だ」たおした木をふみつけ、手でたたいて、わめきたてた。

これを見た二人の子供は、びっくりしてしまった。

「やっぱり

あのにくら

しい、生意

気なさるが

やったにち

がいない。

鎮元子さま

がおもどり

になったら

どうしよう。

お前達には

るす番もで

きないのか

と、きつと

しかられよ

う。くやしい。くやしい。さるめをどうしたらいいだ

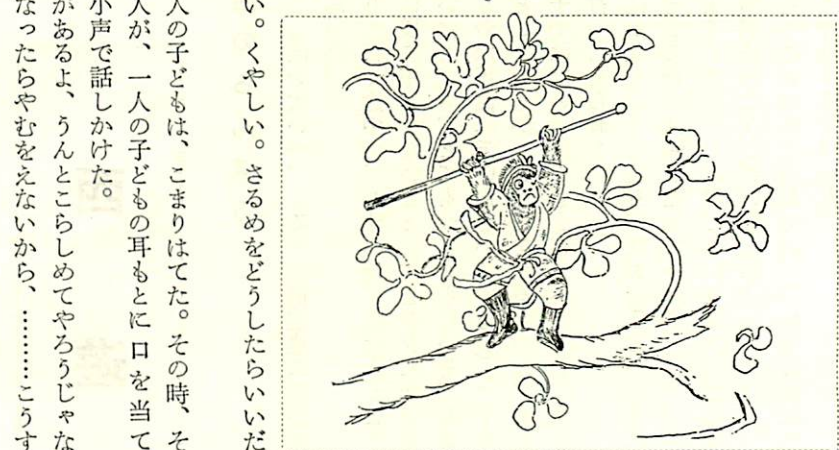
ろう。」

そこで二人の子どもは、こまりはてた。その時、そ

のうちの一人が、一人の子どもの耳もとに口を当て

て、なにか小声で話しかけた。

「いいことがあるよ、うんとこらしめてやろうじゃな



いか、こうなったらやむをえないから、………こうす

るんだ。」

「なるほど、そいつはうまいことだ、よし、やろうよ

気づかれないようにな。そつと……そつと。

すぐ二人の子供は、足音をしのばせて、三蔵法師

と、三人の弟子のいる部屋へ、近づいた。

そのうちの一人が音も立てずに戸をしめて、がちャリ

とかぎをしめた。

その音に気がついた悟空が、

「なにをする。ひきょうなまねはよしな。」

悟空は、体当たりして、戸をうち破ろうとしたのだ

が、がーんとはねかえって、どうすることもできな

い。つまりいけどりにされてしまったかたちである。

「やーい、いいきみだ。だいじな、にんじん果の木を

よくもめちゃ、めっちゃしたばつだよ。ご主人さまの

おかえりまで、そこでゆっくりやすんでいな。」

「ああ………これで、すーっとした。」

二人の子供の悪口が、戸の向うからきこえていた。

む ち ぜ め

法師は一人ため息をつきながら、

「悟空、こんどもお前の失敗だ。お前のために、何度

ひどい目に合っただろう。」

これから天竺へ行くまでは、もつともつと大きな失敗をするであろう、運がわるければ、向うへつくことも出来ないかも知れぬ。三蔵法師は、そんな心配もして、二ど三どためいきをついたのであった。

「お師匠さま。」と、悟空は、わざとご気分とりのつもりでげんきに云った。

「心配なさることはありません。わたしも齊天大聖孫悟空。少しはちえもあります。こんなところを出るくらいは、何でもありません。この悟空のうでまえをとくとごらんください。」

「きょうだい、そんなこと云って、本当にここから出られるかい。戸には鍵がかけてあるのだよ。お前だけはお出られても、他の者は出られないではないか。」

八戒も心配そうに、そう云った。

「また八戒のおくびょうがはじまった。お前なんか、食べものことでも考えていればそれでいいのだ。」

悟空はわらいながら、如意棒をとりだして、ぶつぶつじゅもんをとなえながら、戸の鍵にあてた、すると、かちつと音がして、戸がすうつとあいた。

「お師匠さま、悟空の手並は、こんなものです。」と、得意顔で云う。

「外には月がでています。道もよく見えますから、い

まのうちちに遠くへ逃げましょ。八戒、悟浄、さあお供をするのだ、荷物を忘れるなよ。」

「うん、そうするよ。で、きょうだいはどうするつもりだ。」

「すぐ追いつくよ。これから、さっきの二人の子供をちよつとからかってやるんだ。」

法師と二人の出しが出かけたあと、悟空は、子どもたちのねている部屋をのぞきみた。

「やあ、よくねこんでいるな。ついでに、一月もねむらせてやれ。」

からだの毛をむしり、ねむり虫にして、まどからはじきこんだ。虫が子供のからだにとびつくと、二人は一そう大きなびきをかきはじめた。

「うまくいった、これでよい。」

悟空は、三蔵法師のあとを追っかけた。そして夜明けには追いつくことができた。

夜通しあるいて、法師もでもつかれていた。松の木の下で、みんな休んでいるところだった。

それでも法師だけは、正しくすわっていたが。八戒と悟浄は、死んだように、長くなってねむりかけていた。悟空は三人のそばへよって、足をのばした。

まもなく、空が急にさわがしくなった。

四人のそばへ、雲の中から、どっとおりてきたものがあった。それは五莊観の鎮元子で、旅からもどり、二人の子供から悟空のらんぼうをきいて、すぐさま追いかけてきたのである。

鎮元子は、三蔵法師に、ていねいなあいさつをして「あなたは、天竺へ経文をとりにおいでになる方ではありませんか。」と、ことばしずかにききました。

「さようで」と法師のかわりに悟空がこたえた。

「するとあなたは、五莊観へおたちよりになったでしょうね。」

「いやよらない。みちくさはきらいだから、まっすぐにきたよ。」

「そう、うそ、このうそつきめ。」
おとなしくていねいだった鎮元子が、いきなり、どなりつけた。

「わしをだれだと思ふ。五莊観ではな、有名な鎮元子だ。手前達は、五莊観へよつたではないか。宝もののにんじん果を手あたり次第にぬすみ、その上木をたおしたことも、子供達にきいて来たのだ。さあ、木をもと通りにするならよし、できないなら、このままではすまされぬぞ。」

「このままではおかぬと云うのは、こつちのことだ。」

お師匠さまにぶれいをする、こうしてやるぞ。」

悟空が、ぱつと飛び上つて、如意棒でなぐりつけようとする、鎮元子は、着物のそでをひろげて、何やらじゅもんを唱えると、あらふしぎ、悟空は、鎮元子のひろげたそでの中へ、音もなく吸い込まれてしまった。つづいて、悟浄、八戒、法師までも、一つのそでにすいこまれてしまった。白馬も勿論すい込まれてしまった。

「はっはっは。わしの力は、こんなものよ、おどろいたるう。」

鎮元子は、五莊観へもどると、さっそく、四人をそでからつまみ出して、家来を呼びよせて、

「こいつらを力いっばいうて」と皮のむちでなぐりつけさせようとした。

「おっと、まちな。」

悟空は、法師の前に立つて、ふりあげたむちの下でさげんだ。

「どうか、お師匠さまをうつだけは、ゆるしてくれ、そのかわり、わしをうんとうってくれ。」

「いいかくごだ。よし、うってやろう。」

鎮元子は、ほめたのか、おこっているのか、わからない、わらいかたをした。

「さるのくせして、うまいことを云やあがる。だがな、そう云ったからって、かわいそうだなんで、手前をうつのを中止するわけではないぞ。法師をうつのはあとにして、まずこのさるからうて、さるをなぐれ。」

鎮元子のけらいは、力いっぱい皮のむちをふりおろした。しかし悟空は仙術の名人だから、うたれて、へたばるようなことはない。じゅもんをとなえ、からだを鉄にかえてしまうから、いくらうたれようが、たたかれようが、何ともないわけだ。

「次ぎは、法師の番だ、えんりよするな。」と鎮元子が云った。

悟空は、それをきくと、両手をひろげて、法師の前に背を向けて、鎮元子にくっつかかた。

「わしがかわりにうたれようとする気持でいるのに、お師匠さまをうつとはひどい。だいいちお師匠さまは、何もしてはおられないのだ。にんじん果をとったのも、木をめちゃめちゃにしたのも、悟空の考えでしたことだ。お師匠さまをうつ法はない。もつとわしをうて。」

「よしよし、お前はよくよく、うたれるのがすぎなさるだな、そんなにうたれたければ、うってうって、うちのめしちまえ。」

「はっ。このくらいではいかでしよう。」

鎮元子のけらいのふりあげる皮のむちはびしりびしりと、悟空の体に、うちおろされた。いく度もいく度も、そのうちに日がくれて、あたりがぐらくらくなって来たので、うつ手をやめた。

「またあした、ゆっくりむちをごちそうしてやるう。」
こう云って、鎮元子とけらいたちは、柱に四人をしぼりつけて、おくへひきあげていった。

足音が遠ざかるのをきいてしばらくして悟空、

「さあ、ここからぬけ出しましょう。」

まず、じぶんのなわをとき、次ぎに法師をとき、八戒、悟浄も助けた。

それから、そばの柳の木を四本切ってきて、柱にくくりつけ、ふっと息をふきかけると、やなぎは、法師と、悟空、八戒、悟浄の四人のすがたに変わっていた。

「鎮元子め、これがやなぎの木とは気づくまい。ぶつなり、切るなり、かってにするがいい。」

四人はそつと、わからないように、五荘観をぬけだして行った。

柱にしばられた四本の柳は、それぞれ四人のかっこうで、今日のつかれに、ぐったりとなつて、深いねむりに入っているようにみえていた。

以下次号



田舎医者 見川鯛山 (其二)

福助屋

那須温泉みやげ物商店会々長、福助屋主人阿久津平七君が、会員六名を引きつれ台湾、香港の視察旅行から帰ってきた。そしてその日、バツタリと床にいついた。嘔吐と激しい下痢と発熱で、ひどい衰弱だった。

コレラ!!私はずっとタマゲタ。

「最後に香港のレストランでいろいろ食べたが、別にヘンなものもなかっただ」

かすかな声で彼が云った。だがその枕もとでカミさんがキンキラ声で喋り出した。

「六十にもなってサ、私やめろって言ったんだ。コケンだの羊カンだの味噌漬売ってる土産物屋が、外国まで視察に行くことねんだよ、いったい全体なにを視察にいったんだか、仲間の顔ぶれ見りゃわかる、エビス屋だの寿々屋だの喜久屋だの大久保商店だの、ロクなのいねえよ、どいつもコイツもみんなアノ方じゃ有

名だ、なかでも福助屋が一番だけどネ!!」と怖い目で福助屋をニラム。「どだいアンタなんか外国サ行くガラじゃね

んだ、ケ
チンポで
銭惜しん
だから、
マそこん
所が相棒
と違つて
メカケ持
てねえだ
け少しや
マシだけ
どネ。で
も働きが
無えんだ
よソナ



やつ、毎日毎日魚釣りばっかし!!、いつも先生引っぱり出して、ゴメンなさい先生、見川先生なら車に乗けてってくれるらしいどうせヒマな人だから!!、なんて悪い人。今度は台湾だの香港でどんな釣りやって来たんだが、白いんだの黒いんだの、世界各国いっぱい居るんだってねえ先生。見て頂戴こんなになって、イイ気味!! アラ? でもヘンだねえ、喜久屋も寿々屋もみんな同じもの食べているのにナントモないよオ? イイ考えだ!! よくもコンナに喋りながらモノが考えられたものだ。この女は口が顔の半分以上もデカイから脳の命令を受けずに勝手に喋り出し、脳は脳でべつのことを考えられる仕組になってるのだ。そしてソノウえ、カミさんはもつと貴重な発見をやった。

「アラアラア? 変ねえコレ、先生見て!! 沢庵だのキアラ路だのばかし吐いて、こんなもの外国のレストランで出すのオ?、この路、ウチで売ってるのと同じじゃないの!」

福助屋はその時、ひと声うめいて死んだフリをしてみました。大変都合の悪いことになったらしいのだ。私と看護婦の宮本サンとは早速リングルの点滴にとりかかった。カミさんが階下の店へ下りて行くと、福助屋がニワカニ生き返って言った。

「先生オレ困った、本当はオレ、どこサも行つてねえだ。オレだけずつと宇都宮サいただ、オレが店買つてバアやらせてるタヨ子がとこだ、先生タヨ子を知つてべ? 去年ウチで売り娘やつた娘だア、先生もボインでイイ娘だつて誉めてたべな、今度の旅行は二度とねえチャンスだつたもんな。ナニ、病氣の原因オレわかつてるだ、オレ家で売つてるキアラ路が悪かつただ、先月食品衛生が廻わつてきて、カビ生えてつから捨てろつて言われたのを勿体ねえからタヨ子んとこサ持つてつて昨晚二人で食つただ、今ごろタヨ子もヤラてるべなア……。先生からもウマク言つてカカアと胡麻化してくれ!」

私も店へ下りていった。どうせ注射は一時間もおかかるのだ。店でもカミさんはデカイ口で喋っていた。

「ネ、おいしい羊かんでしょ、遠慮しないで食べてみて、食べたんだから買いなさいな、私ア言いません、サアもつと厚く切つて、ネッおいしいでしょ、三本入りで九百円ですハイ、むかひの喜久屋じゃ千円よウチは特別安いです。アアラその旦那さんオ久しぶり、チットもお変りなくつて、私よろしく憶えてますウ、今年もまた若松旅館ですか、あそこサービスいいでしヨ、那須じゃ一番ですウ、今年もまたキアラ路

いかがです、これウチの特製ですウ、那須じゃウチだけ、デモ変ネ、何ンデコレが香港ナンカニ？、いいえ何んでもないンです、サどうど摘まんてみて下さいな
おいしいですよウ、旦那さんには去年いつぱい買ってもらいましたっけねえ、エッ那須は初めて？ アラまあ。オヤ、先生ソコに居たのね一寸見てニ、この路アレと同じでしヨ
おッかし
いよウ、
ハイハイ
有難とございます
只今すぐ
お包みしますから
先生チョットどいて、悪いわネエ、
こんなもの
の外国で



も食べるのかしら？
輸出してるんだぞキツト。父ちゃんはアンタ想い出して食ったんだろなア」私が福助屋を弁解したら、カミさんは顔の上の方の小さな鼻で「フン!!」と言った。
その時客がカミさんに何か云った。
「ナ、何ンだつてニ!!、喜久屋で羊カン三本入りが八百円!!、あのカカアまた協定破りアがつて、ヨーシ文句言ってくる畜生め!!
道路の向う側の喜久屋の店で二人のカミさん達が怒鳴りあつた。キンキンキン大変だつた。フト、さっきの旦那が私にキヤラ路の値段をきいた。私はその箱を遠くのカミさんに見せた。カミさんは口が忙しいから両手の指で六だと言つた。私は客に六千円だと言つた。客は高すぎると言つた。私はデワ六十円だと言つた。客が私にソレを包めと言つた。私はソレを一生懸命包んで売つてやつた。コトによると六百円だったのかな？ カミさんが出て行つたときよりモット怖い顔で走つてきてキンキン叫びながら二階へ駆け上つて行つた「喜久屋のアマに聞いたぞ、アンタ宇都宮で一週間もタヨ子抱いてたつてな畜生!!
入れちがいに宮本さんが往診靴持って下りて来た。二階のアトのことは、私たちでは、もうダメなのだ。

も食べるのかしら？
輸出してるんだぞキツト。父ちゃんはアンタ想い出して食ったんだろなア」私が福助屋を弁解したら、カミさんは顔の上の方の小さな鼻で「フン!!」と言った。
その時客がカミさんに何か云った。
「ナ、何ンだつてニ!!、喜久屋で羊カン三本入りが八百円!!、あのカカアまた協定破りアがつて、ヨーシ文句言ってくる畜生め!!
道路の向う側の喜久屋の店で二人のカミさん達が怒鳴りあつた。キンキンキン大変だつた。フト、さっきの旦那が私にキヤラ路の値段をきいた。私はその箱を遠くのカミさんに見せた。カミさんは口が忙しいから両手の指で六だと言つた。私は客に六千円だと言つた。客は高すぎると言つた。私はデワ六十円だと言つた。客が私にソレを包めと言つた。私はソレを一生懸命包んで売つてやつた。コトによると六百円だったのかな？ カミさんが出て行つたときよりモット怖い顔で走つてきてキンキン叫びながら二階へ駆け上つて行つた「喜久屋のアマに聞いたぞ、アンタ宇都宮で一週間もタヨ子抱いてたつてな畜生!!
入れちがいに宮本さんが往診靴持って下りて来た。二階のアトのことは、私たちでは、もうダメなのだ。



言万體観音奉納者芳名

第八集

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
世田谷	島田善次郎	大磯町	渡辺勝亀	台東区	上村吉太郎	渋谷区	石原俊明	入間市	田島よね	名栗村	佐野恒雄		
練馬区	篠島とら	〃	渡辺勝三	浦和市	高村三千雄	市川市	鈴木陽子	〃	粕谷つる	飯能市	入子比代		
〃	吉村貞美	〃	渡辺修三	熊平	熊平源藏	港区	鈴木道男	名栗	川崎清	〃	武居藤吉		
〃	永沢敏男	〃	北見イノ	外	中野ます	柳沢光之助	綿貫次郎	〃	木崎正治	〃	外	九体	
〃	甲賀寿男	小鹿野	川端甚松	羽村町	小林ミツエ	千代田	大橋朝次	入間市	増岡繁治	青梅市	平岡正二		
〃	深野文吉	中野区	真田信二郎	田無市	外	大分市	吉川朝次	飯能市	鈴木のぶ	東大和	田中満洲男		
〃	有馬祐園	〃	森田門二	〃	秋田源三	〃	吉川周子	浦和市	嶋田光衛	田無市	木橋一泰		
〃	池田嘉秀	〃	森田ウメ	〃	浦野善次郎	文京区	大野君子	品川区	寺下英幸	名栗	浅岡屋商店		
〃	外	〃	榎原千吉	人間市	石田しげ	〃	神林岩藏	羽生市	加藤昇	所沢市	針生ナツ		
〃	大野良郎	目黒区	齋藤かほる	鎌倉市	林あやめ	岩手県	富沢敏太郎	与野市	埼玉トヨタ	所沢市	桜井タキ子		
杉並区	土屋均	〃	〃	〃	林依久	〃	五嶋義明	〃	拾体	所沢市	大沢晴夫		
新宿区	小山とみ江	中野区	時田毅三郎	〃	〃	飯能市	小久保正雄	世田谷	芝谷武	〃	小山権之丞		
豊島区	朝生太吉	〃	〃	文京区	吉原鎭子	〃	赤須文也	日野市	高山光典	狭山市	小沢満喜		
〃	謡曲会一同	港区	谷長介	〃	富田金重	〃	加藤延作	名栗	佐野義平	名栗	深沢貴世奈		
〃	長ミネ	〃	外	世田谷	外	〃	栗原義治	上野	政吉とめ	飯能市	小柳稻年		
〃	岩本勝俊	台東区	山賀松江	〃	富田金重	人間市	神林千之助	江端	葛飾区	〃	〃		
〃	総持寺	〃	〃	〃	社長の富田金重	〃	〃	〃	〃	〃	〃		

一月末日までの分
 一、敬称は略させていただきます
 一、〇印はA観音
 一、間違がありましたら御教示ください

飯能市	宿谷 文平	板橋区	松田 義春	〃	他 一体	〃	〃	〃	喜多川鶴千代	足立区	保谷 弘道
〃	枝久保よし	〃	和田 作治	〃	北村 三男	〃	〃	〃	中村 アサ	新宿区	榎川 恵一
世田谷	中村 幸治	名 栗	町田弥太郎	〃	田中 貞雄	〃	〃	〃	三沢 孝	〃	中野 順二
板橋区	小林 文子	〃	佐野 道夫	〃	青山 直弥	〃	〃	〃	榎本 登	葛飾区	小島 聡一
〃	岡田 和子	〃	岡部 広子	〃	佐久間 一	〃	〃	〃	坂本喜太郎	青梅市	伊藤 三吉
渋谷区	織田 貞子	〃	加藤真太郎	〃	佐久間真治	〃	〃	〃	北田 加納	〃	雪野 輝雄
青梅市	小峯 久治	秩父市	大野 すな	〃	春藤 きぬ	〃	〃	〃	鈴木十三雄	〃	千代田 政勝
〃	島田台一郎	飯能市	塩野 福恵	〃	熊倉芳次郎	〃	〃	〃	金子金三郎	〃	田島亀次郎
〃	浅見 寅野	名 栗	塩野 キク	〃	井染 道人	〃	〃	〃	吉羽 義武	〃	小沢 順吉
川口市	永瀬 一郎	〃	清水儀三郎	〃	栗山六之助	〃	〃	〃	伊藤あや子	〃	島崎 広司
〃	若海 健一	中野区	遠藤政次郎	〃	齊藤 てい	〃	〃	〃	瑞穂町	〃	川越市 井上 明治
春日部	高橋 唐治	所沢市	石井 力松	〃	葛飾区 上松 鈴子	〃	〃	〃	浦和市 遊馬 家定	〃	武蔵野市 山田 盛治
清瀬市	柴崎勝三郎	〃	岡部 松雄	〃	葛飾区 山口 はな	〃	〃	〃	浦和市 波多江寿子	〃	所沢市 平田啓太郎
名 栗	島田 松男	〃	鈴木 なみ	〃	世田谷 小木曾千代乃	〃	〃	〃	清瀬市 大岡 治美	〃	渋谷区 小口 敬一
飯能市	渋谷 進	〃	浅野 忠行	〃	武蔵野 長谷川千造	〃	〃	〃	滋賀県 保谷市 川上 善二	〃	東村山 小原 英治
名 栗	浅見 新治	〃	肥田野 孝	〃	名 栗 砂崎 庫雄	〃	〃	〃	所沢市 木下 元吉	〃	第八集合計 二七二
台東区	森重 秀雄	〃	齊藤 上里	〃	平岡喜代志	〃	〃	〃	入間市 田代 てふ	〃	内訳 BA 一九三
武蔵野	森田 寿子	〃	大館菊之助	〃	葛飾区 横田 林造	〃	〃	〃	名 栗 岡部 好央	〃	内訳 BA 一七九
名 栗	石井 栄治	〃	中村 兼吉	〃	小暮 良平	〃	〃	〃	浦和市 福本 泰晏	〃	累計 七、六八八
和歌山	片嶋 礼宣	〃	西沢富久寿	〃	野村清太郎	〃	〃	〃	浦和市 小菅 つね	〃	内訳 BA 一、三九二
板橋区	服部 共佑	〃	荒幡 武一	〃	豊田 れん	〃	〃	〃	津市 越水 金治	〃	内訳 BA 六、二九六
〃	板橋良太郎	日野市	雪印乳業工場	〃	浦和市 大館 栄吉	〃	〃	〃	川崎市 越水 金治	〃	〃
住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名

壹万體観音尊像御奉納の勸進

鳥居観音

埼玉県入間郡名栗村上名栗
電〇四二九七〇四、名栗二七五番

切……り……と……り……線……

御蔭様で七千六百八十八体が奉安されました。定めしこれらの祖霊は、霊場で救世大観音の偉大な功德の力に守られながら、浄土のよろこびに浴しておられますよう。何卒引続きおすすぬめ申し上げます。

壹万體観音尊像申し込み用紙

区分	A B	供養霊位（何々家先祖代々又は戒名）	御住所	号数	御芳名
				取扱者	

永代供養料

観音像A（三三三）五千元 B（二五・五）四月より三千五百円に改訂しました。

御振込先

お払込次第ご仏壇用小観音（一八・八）をお送り申します。

御申込書送り先

埼玉銀行名栗支店、又は埼玉銀行練馬支店
鳥居観音 又は東京事務所

納経塔建立に就て

面白岩上の納経塔

昨秋、有縁の皆様のご協力で、救世大観音がめでたく、落慶いたしました。又堂宇内の壁面に奉安された老万體観音もすでに約七千七百余体になりました。誠に感激に堪えません。

就ては此の老万體観音に抱かれた皆様の御先祖様のご供養を一層丁重に且つ意義深いものに致したく存じまして、救世大観音の右側の面白岩に、高さ十五米の納経塔を建立すべく発願いたしました。

そして三信工業請負いのもとに昨年六月十七日に地鎮祭を執行いたしました。只今コンクリート打ちをしております。この落慶式は明年昭和四十八年の春の予定で工事を進めて居ます。

ストーパーの歴史

ストーパー（仏舎利塔）は始めは、お骨を埋めた土饅頭の型でしたが、時代の進むに従い台座が複雑になり又沢山の仏像其他が刻み込まれて、益々荘厳美麗とな

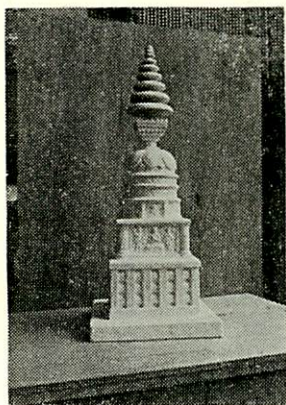
り釈迦入滅の時は、分骨して八塔建立されましたが、アショカ王の時代に仏舎利を分けて、八万四千の塔を建て様とされたそうです。

今回建立する納経塔の型は、ストーパーの最盛期だった、ガンダーラの典型的な形式を取り写真の様な原型を謹作してみました。

内部の上方円形の処には印度式釈迦如来（約二米）を安置し、下の角形の処に、一万體観音に対し一万巻の般若心経を納めますが、是が完納されたら将来五万巻位納められる様な設計であります。

写経のおすすめ

写経のご利益は一切の罪業を消滅して普く仏果を成就すると云う偉大な御功德がありますので、七月号に



納経塔の原型
浄写の上ご
奉安をお願い
致します

於て、ご報

告いたしま

す故、その

節は何卒ご

浄写の上ご

奉安をお願い

致します

終わった行事と救世大観音

除夜の鐘

四十六年の大みそか、深々とふけふく十一時四十五分、本堂では有馬導師をお迎えして、除夜の鐘の法要が開始されました。列席者は代表役員平沼宏之、同夫人を始め関係者十数名が参列して、観音経読経のうち、百八の鐘が鳴らされました。最後の鐘が鳴らされた時は早くも零時十五分、壬子の新年となっていました。一同新年のあいさつを交し、明けるには間がありませんので、家にもどりました。

その頃すでに参拝の人もあって、前庭の小砂利をふむ足音がさくさくと、きこえました。

新年祈禱会

昭和四十七年（壬子）元旦祈禱会、十時、本堂にて年末にお申し込みを受けた、祈禱札を本堂の観音様の前にかかけて、献燈、献茶湯、献香について、祈禱が開始され、諸願千余名の芳名が読み上げられました。

参列の方々は、平沼ご夫妻、同宏之、花子、原田愛助、森田角三郎、栗原通任、齊藤寿夫、平井敏治、黒田利平、水上清、浅見富藏、同達次郎、平沼玉枝、同弘己ご夫妻各位で、和やかに執行いたしました。

節分会

二月四日は午後三時本堂に於て法要後、節分豆蒔を執行いたし、お供えた福豆を参拝の方々にお分けしました。

救世大観音と壱万體観音

昨年十一月救世観音落慶式と壱万體観音奉安式が、皆様の御協力により、盛大に執行できました。年改まりました。新春から多くの参拝者が来山されるようになりしました。これは観音様のご利益によるものと信じ益々目的にそって経営いたすように、考えております。宗教法人、白雲山鳥居観音は、次のようなスケールに発展いたしました。

白雲山内の七堂

本堂と庫裡

堂内の七観音、木彫、平沼開祖の製作による、重要な観音像で、参拝も便です。庫裡で受付、諸願成就の祈禱を勤修します。入山参拝、散歩一日楽しめます。

鳥居文庫

国重要文化財指定文化財の仏像、彫刻、美術品が多数陳列されています。

仁王門と大黒殿

何れも木造の建物で、平沼開祖の構想によるもので重要な木造建物で、木彫仁王尊と大黒様が参拝者の足を引とめます。

玉華門

三蔵法師にゆかりをもつ門で、参道にあります。

三蔵塔

玄奘三蔵の靈骨を納めた、高さ三十三米の法塔です

救世大観音

白色の三観音で堂内には老万体観音を奉安供養してあります。

納経塔（建立中）

老万体観音を一層鄭重にまつるため写経を納めます

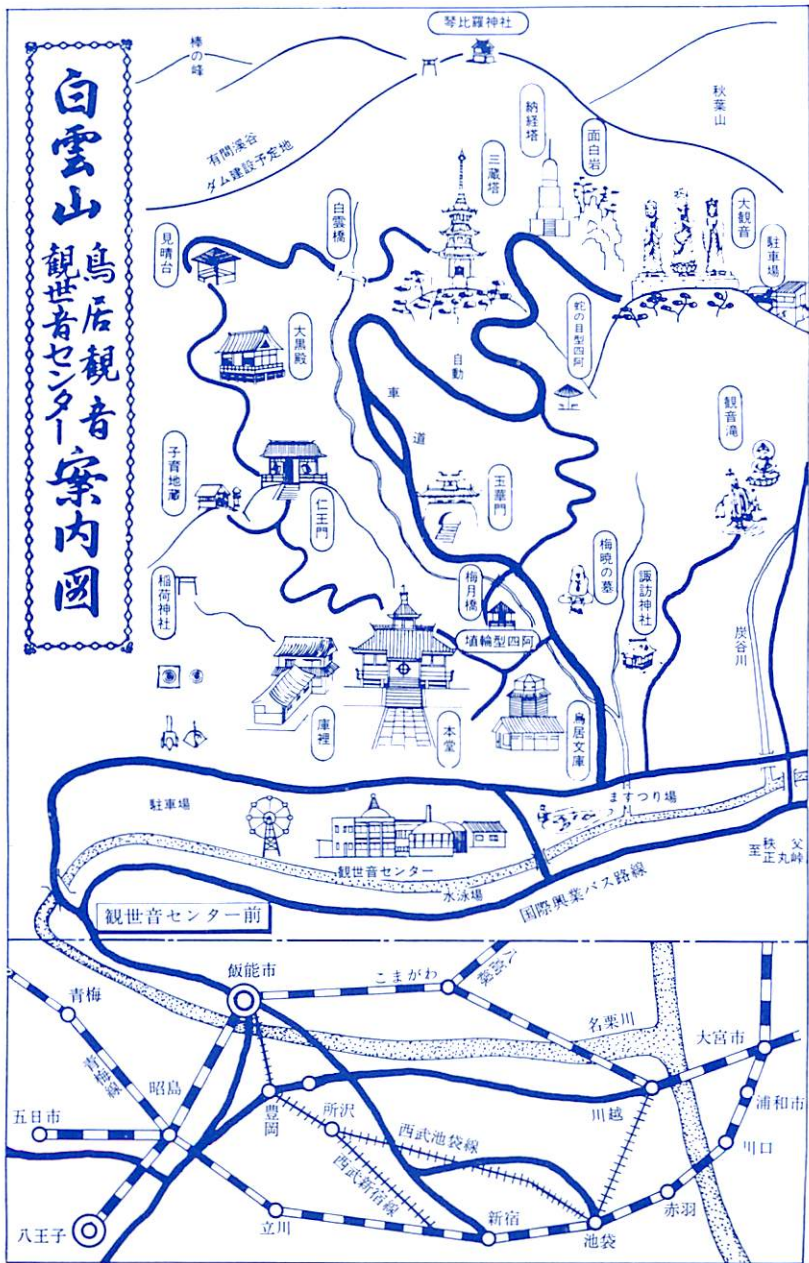
老万体供養と健康の道場

月例法要は勿論、昨秋二季の例大祭を通じて、仏縁を結ばれた、信仰厚い皆様方のご来山を始めとし、尚今後、逐次にご奉安により関東を中心として、北は北海道、南は九州方面からもご参拝賜り、老万体観音の奉安もいただく状況にありますので、一層当山の名も知られて、最近に於て都市近郊の人々が、四季を通じてレジャーを求めて、来山される方々が多くなりました。近代科学文明、産業経済の発展、科学技術の進歩それらの社会の中に失われようとしている、精神文化身心の健康などを思うとき、当山の明るい太陽、きれいな空気、水、山と緑、花や小鳥達、その自然の中での一時は、理くつなしに、心にふれるもの、体に感じることが少なくないと感じております。

とりお 第二十二号 発行日 昭和四十七年四月一日
編集兼 埼玉県入間郡名栗村 鳥居観音 岡部 千三
発行人
印刷所 浦和市仲町二ノ八ノ十五 武州印刷株式会社
発行所 鳥居観音 電話〇四二九七〇四名栗二七五番

白雲山

鳥居観音 観世者センター案内図



春の行事

- 4月17日 春季例法要10時より執行
本堂、三蔵塔、救世大観音、壹万體観音 供養
壹万體観音奉安式(落慶式以後47年1月末日奉安の分)
- 5月8日 花祭り 10時より執行
本堂に花み堂安置し 甘茶の用意があります。
- 5月17日 月例法要 10時より執行
本堂、三蔵塔、救世大観音、壹万體観音、供養
- 6月17日 月例法要 10時より執行
本堂、三蔵塔、救世大観音、壹万體観音 供養
- 備考
ご詠歌の奉詠 月例法要にはご詠歌の奉詠がありますので、御参加くださいませ。

月例法要に御祈禱のお進め

毎月17日にはご祈禱もいたしますので、お申込みくださいませ。

願意 家内安全、当病平癒、安産、試験合格、営業繁昌、
交通安全、その他願い事。

祈禱料 金500円。 金1,000円。 金2,000円。

。尚、常時祈禱いたします。御手紙でお申し込みの場合は祈禱
直に郵送いたします。

白雲山花だより

4月の休み～5月のゴールデンウィークには、参拝の方々を始め、ハイキングで山を愛される多くの人々でにぎわいます。当山の花は、自然の中に手を加えたり、苗木を購入し、植栽撫育して、ようやく見られるようになりました。

花は丁度つつじのむらさきと赤が、針葉樹とわか芽の萌え立つ中に点綴して、仁王門、三蔵塔、大観音をとりまいた景観は、何とも云えません。

その他、山吹、椿、山ざくら等も点在しておりますので明日への健康のために遊歩道のそぞろ歩きをお勧めいたします。どうぞ明日への健康に、ここ白雲山鳥居観音へご来山くださいませ。